

## スタンフォード便り (4) Q&A 編

竹村 浩昌\*\*\*

\* Postdoctoral Fellow, Department of Psychology, Stanford University

\*\* 日本学術振興会 海外特別研究員

Stanford大学の竹村です。今回で最終回ですので、一方通行の体験記で締めくくるのではなく、VISIONを購読されている大学院生の方々からのご質問に回答するという形を取ります。私見に基づいた回答になりますので、お気軽な気持ちで読んでいただけますと幸いです。

### Q. 研究テーマの選定に至って気をつけたことなどはありますか？

ポスドクの場合はPIと合意した内容で研究を進めて行くことがほとんどだと思いますので、よく議論しておくことが重要だと思います。ラボに来たばかりの時点では、要領がつかめていないことが多いので、自分から完全なプロジェクトの提案をすることは難しいかもしれません。ただ大学院生に比べると、ポスドクは学位を持った研究者であるわけなので、一定の自主性もあつた方が望ましいと思います。私の場合は、いくつかの研究案（プロポーザル）をPowerPointのスライドにまとめてBrianに議論を持ちかけ、2人で議論しながら具体的な部分をつめていくという形で進めて行きました。他のラボメンバーがどういった研究をしているかを知ることも重要で、どういった点でラボメンバーと助け合えるかを知っておくと効率よく研究を進められると思います。また、他のラボメンバーと競合がおこってしまうような内容になる事態は極力避けたいところです。こういったところは、あまり日本と大きく違うという印象は持っていません。

### Q. 英会話に関して、何か心構えのようなものはありますか？

私は英語教育の専門家でも何でもないので正確なところは分かりませんが、スピーキングに関しては間違いを恥ずかしながらとにかく話すのが一番の近道に思えます。発話をして間違えることによって、少しずつ修正して上達することができます。「間違えたらどうしよう」と縮こまって寡黙になってしまうのが一番危険な状況だと思います。

リスニングに関しては、心理学の教科書で良く出てくる「ダルメシアン」のような部分があると思います。会話のコンテキストが理解できない、あるいは事前知識がなければ話にはついていけません。会話のコンテキストを理解できれば、一字一句正確に把握できなくても会話についていくことは容易になります。研究の会話であれば、研究について良く知るほど議論に参加しやすくなりますし、社交的な会話であれば、友人関係や米国の文化を把握するほど容易に加わられるようになります。

個人的には、趣味があるというのは思いのほか助けになると思いました。共通した趣味を持つ友人ができると、会話の内容が自然と盛り上がるため、モチベーションが上がります。また、最初は孤独な海外生活において、趣味を共有する友人の存在は心理的にも大きな助けになると思っています。

### Q. 日本のものはどのくらい手に入るのでしょうか？

割高ではありますが、日系やアジア系のスー

パーはStanford周辺では充実しており、困ったことは特にありません。食品、書籍、電化製品など日本のものは一通り手に入ります。

ただ当然のことながら米国内でも地域差があります。先日はフロリダのSt. Pete BeachでVSSが行われました。私はイスラエル人、イタリア人のラボメイトと部屋をシェアしていましたが、彼らは米国式の朝食をひどく嫌っており、会議で無料の朝食が出るにも関わらず自らイスラエル式の朝食やパスタなどをつくっていました。日本人として彼らに対抗すべく、味噌汁と納豆という朝食の実現可能性について考えましたが、最寄りの日系食材店との距離があまりに非現実的であったため断念しました。

西海岸の大都市（サンフランシスコ、ロサンゼルス、サンディエゴ、シアトル）は概ね良好です。相対的には東海岸の方が手に入りやすいようですが、ニューヨークやシカゴには日系の大型スーパーがあるようです。

#### Q. Stanfordで研究を行っているポスドクは、その後どのような進路を取のでしょうか？

視覚研究の場合アカデミックポジションを希望される方が多いのですが、私の周囲の研究者は口を揃えて「視覚研究で米国でポジションを得るのは難しくなった」と言います。実際に先輩ポスドクの様子を見ていても、非常に厳しいと言わざるを得ません。外国から来ているポスドクの場合は、出身国に戻ってポジションを得るという事例が多いのではないかと思います。出身国の経済状況などにも依存する話で一般化はできません。米国生まれ、米国育ちの研究者が欧州などでポジションを得るケースもよく見ますが、昔と比べて増えているのかは分かりません。あまり明るい話題ではないですが、米国の科学は研究費やポジションの獲得が非常に難しくなっていて、過当競争の状態にあるという認識を私は持っています。特に本国に帰るといふ選択肢のない米国人の就職活動を見ると、「こんな優秀な人でも決まらないの

か」とショックを受けたことが何回もありました。

ポスドクからでも企業等に転職するケースもあります。ただし外国人でポスドクから来た場合は、非移民ビザで滞在している関係上、米国内への企業への転職は少し手続き上のハードルがあると思います。

#### Q. 滞在期間が短期間の場合、こういったことに気をつけなければいいのでしょうか？

1年半未満の場合は、時間がありませんので、具体的に何をやるのかを渡航前はかなりつめておくことが、期間内にプロジェクトを終える上で重要かもしれません。特に1年未満の場合は、ラボに既にいるメンバーのプロジェクトの延長線上にある研究や、自分のこれまでの研究と関連性の高いものを選択した方がうまく行く可能性は高くなってくると思います。私は結局西海岸以外に住んだことがないので本当のところは分かりませんが、車関係でセットアップに時間を取られてしまう米国西海岸よりも、公共交通の発展した東海岸やロンドンといった地域の方が、短期での研究滞在にはもしかすると向いているかもしれません。

#### Q. 今の研究室の強みは何だと思いますか？

- (1) 解析ソフトウェアを開発している研究者と直接議論しながら進められるので、解析に関する理解が深まる上に、目的に最も合ったデータ解析をすることができる。
  - (2) fMRIとDiffusion MRIという2つの手法に精通している研究室で、両方を高いレベルで研究できる環境はなかなかない。
- 以上、2点だと考えています。

#### Q. 米国での研究生活で、嬉しかったことや、辛かったことについて教えてください。

嬉しかったのは、New York Universityなどの大学でトークをさせていただく機会を得たこ

とです。Tony MovshonやDavid Heegerといった研究者の方々に参加していただき真剣に議論していただけたのが本当に嬉しかったです。

辛かったのは、渡航して最初の頃に住居が決まらないなどのトラブルが多かったことや、パーティーなどの場面で他の人達の会話になかなか加われなかったことです。特に社交的な場面での英会話は時間がかかりましたが、幸いにして私はラボメートや友人たちの助けで輪に入れてもらえるようになりました。とても恵まれたことだと思います。

**Q. 渡航前と渡航後で、米国にいる研究者に対する印象が変わった部分はありますか？**

もちろん多少の文化の違いはありますが、最初に思っていたよりは、日本の研究者と変わらない部分の方が多いのではないかと思います。

た。本音と建前の使い分け、研究を進める上での悩み、キャリアの悩みなど、あまり本質的には日本の研究者と変わらない等身大の米国の研究者の様子に接することができたのは貴重な経験だったと思っています。私の場合「違うな」と驚くことより、「同じだな」と驚くことの方が多かったと思います。

**むすびに**

1年間にわたり連載を続けさせていただいた中で、私自身Stanfordに来てから2年間に起こった様々な出来事を思い起こすことができました。文章としたことで、私自身考えをまとめる良い機会になったかと思います。この場を借りて、編集委員の先生方にお礼申し上げます。

2014年5月29日

竹村 浩昌

htakemur@stanford.edu